石巻・大川小 3月11日に追悼

子ども迎える竹あかり

84本 遺族ら手作りで準備

東日本大震災の発生から丸11年となる3月11日、児童・教職員84人が犠牲となった石巻市の震災遺構・大川小で、鎮魂と安全な未来へ願いを込めた84本の「竹あかり」がともされる。遺族らでつくる「大川竹あかりプロジェクト実行委員会」が初めて企画し、代表を務める佐藤和隆さん(55)は「あらゆる立場の違いを超え、多くの人が光の前で一緒に祈る追悼の行事にできたら」と話す。【百武信幸】

演出家の池田親生さん（右）から指導を受け、明かりをともす竹筒に穴を開ける佐藤和隆さん＝いずれも石巻市針岡で

竹あかりは、昨年開館した「大川震災伝承館」北側の広場に設置し、午後5時半ごろ明かりをともす。約5メートルある長い竹の周りを、少し短い灯籠が囲むデザインで、一つ一つは遺族や地域住民らが手作りする。

8日、針岡地区の大川中跡地付近で制作が本格的に始まり、佐藤さんや地区住民、支援者らが手分けして、地元の林から切り出した竹を適度な長さに切りそろえたり、電動ドリルで穴を開ける作業をしたりした。作品をデザインするのは、熊本を拠点に全国で竹あかりのイベントを企画する演出家の池田親生さん(39)。竹筒から明かりがこぼれる際に重要な穴の開け方について「刃を垂直に、ゆっくり下ろして」などと指導した。

談笑しながら「竹あかり」の設計図となる型紙を作る今野ひとみさん（右端）ら

作品は「つないでいく」がテーマ。亡き人に思いはせる日の明かりとして、池田さんは「過去と未来や、天と地をつなぎたい。全国の人たちがもう一度被災地に心寄せ、この地に生きる人にとっては未来に目を向けられる光になれば」と話す。

大川小で6年生だった長男大輔さん(当時12歳)を亡くした今野ひとみさん(51)は地元の女性と「こうして集まるのも学校の行事以来だね」などと語り合いながら、和気あいあいとデザインの型紙を作る作業を進めた。今野さんは「子どもらが帰ってくるのを温かく迎える明かりになってほしい。震災後、地域の人との交流も減ったので、毎年、みんなで一緒に作る行事として定着してもらえたらいい」と話した。

同小6年生の三男雄樹さん（当時12歳）を亡くした佐藤さんは「震災から11年になるが、災害に区切りはない。あの日を忘れず、災害の犠牲者を出さないという願いを込め、5年、10年と続く行事にしていきたい」と話す。

13日以降、3月6日までの毎週日曜日に竹あかりを制作し、誰でも参加できる。詳細はホームページ（https://www.ookawatakeakari.jp/）。